

<論文>

学生による地域活動評価によるインパクト —青森県平内町における地域活動アセスメント事業から—

宮本 雅央*

抄 録：

目的：2016年に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」以降、わが国では地域共生社会の実現を目指した取り組みが進められている。地域課題の解決力の強化や包括的な支援体制の整備の取り組みには、地域アセスメントによる情報把握が基盤となる。そして、保健・医療・福祉に限らない様々な資源の把握を目指す地域アセスメントの実践は、実施地域や実施機関などの特殊性が含まれており、様々な事例とその結果を蓄積する意義があるといえる。そこで、本研究は、青森県平内町において大学生が実施した地域活動アセスメント事業の結果を基に、実施地域における影響を評価することを目的とした。

方法：本研究では、青森県平内町で実施された地域活動アセスメントの成果を分析対象とし、インパクト評価の視点から、アウトプット（結果）とアウトカム（効果）、インパクト（短期、長期の変化）を準拠枠に設定し、アセスメント事業に携わった関係者の変化について分析を試みた。

結果及び考察：分析の結果、アセスメントに携わった学生の実施地域に対する印象や地域における活動に対する意欲の変化が認められ、実施地域への短期的・長期的な変化としてインパクトをもたらす可能性が示唆された。一方、実施地域の変化を測定するための長期的なデータ収集が今後の課題として挙げられた。

キーワード：地域共生社会、地域アセスメント

1. 緒言

2016年に閣議決定された「ニッポン一億総活躍プラン」では、地域共生社会の実現を目指すことがされた。地域共生社会とは、同プランにおいて支え手と受け手という位置づけを越えて、地域のあらゆる住民が役割をもち、お互いに支えあひながら自分らしく活躍できる地域コミュニティが実現した社会を指している（内閣府：2016, p16）。同プランを受けて、「地域力強化検討会（地域における住民主体の課題解決力強化・相談支援体制の在り方に関する検討会）」が立ち上がり、経済・財政再

生計画の実行とともに地域共生社会の実現に向けた様々な取り組みがモデル事業として実施されてきた。それらの地域課題の解決力の強化や包括的な支援体制の整備のモデルとなる様々な取り組みは、地域の生活課題の実情だけでなく風土や習俗などの文化的背景を含めた地域アセスメントを起点としている。そのため、保健・医療・福祉に限らない多様な地域資源を巻き込みながらコミュニティづくりを展開し、地域共生の目指す形を実現しようとしている。したがって、起点となる地域アセスメントの実施は、その後の活動を大きく左右する重要な局面といえる。さらに、その情報収集範囲を含めた実施方法に関する知見は、地域性や実施機関などの特殊性があることから、様々な事例とその結果を蓄積する意義があるといえる。

*福祉マネジメント学科 社会福祉学講座

他方、地域アセスメントに関する知見は、保健・医療など特定の専門領域での実践基盤とするための報告や、実習や演習などの教育効果を高めるために地域の情報を把握する実践報告などが散見される。特に、学生が地域アセスメントに携わった結果に関する報告は、学生自身の学びに関する評価がほとんどである。アセスメント実施地域への影響や効果については、副次的に取り扱われている報告はあるものの、主たる焦点とはされていない。地域アセスメントを実施する主体によって、その効果や影響の変化が予測できるものの、現状ではそれらを論ずるほど知見が蓄積されてはいない。

そこで、本研究は、青森県平内町において大学生が実施した地域活動アセスメント事業の結果を基に、実施地域における影響を評価することを目的とした。

2. 研究方法

(1) 分析対象及び方法

本研究では、上述したアセスメント事業の成果として公表されている報告書(宮本:2022)を分析対象とした。そして、それらの成果をプログラム評価の一つであるインパクト評価の視点を援用して分析する。

インパクトについて、OECDは「開発的な介入によって創出された肯定的または否定的な、主要または副次的な、長期的効果 (Impact: Positive and negative, primary and secondary, long-term effects produced by development interventions)」としている(塚本・関:2020, pp18-19、OECD)。また、国際協力機構は、インパクトは「事業によってもたらされた変化」(JICA)を指すとしている。インパクト評価とは「事業が対象社会にもたらした変化(インパクト)を測定する評価手法」(JICA)とされ、いかなる評価のアプローチであっても、プログラムや介入とそれらに起因する変化に焦点を当てるとされている。そのため、反事実(観察対象が仮に参加しなかった状況で生じるアウトカム)(塚本・関:2020, pp32-33)とプログラムによって起こった事実としての結果を比較するため、反事実の推計と介入後の変化を測定できるよう質的・量的を問わず様々な手法でデータを収集する。

本研究では、これらのインパクト評価の視点から、アウトプット(結果)とアウトカム(効果)、インパクト(短期、長期の変化)を準拠枠に設定し、アセスメント事業に携わった関係者の変化について分析を試みる。ただし、本研究では事業実施後の対象地域におけるデータ収集は実施していないため、アウトカムやインパクトについては先行研究の知見と合わせた仮説の構築に留まることを先に述べておく。

(2) 倫理的配慮

本研究は、青森県が実施した委託事業の成果として公表している報告書(宮本:2022)をデータとし分析を加えることを目的としている。地域や活動名称などの固有な名詞は、同事業報告書として既に公表されている。そして、主なアセスメント事業の調査対象は地域活動であり、人を対象としていない。さらに、その後の変化については公表されている事業報告書及び先行研究を基にした分析であり、対象への侵襲性はない。

3. 結果

(1) 地域活動アセスメント事業

以下、実施されたアセスメント事業の概要を宮本(2022)より抜粋する。

2021年度、青森県において『『支え合い、共に生きる』地域の実現に向けた保健・医療・福祉推進事業』として、地域共生社会実現に向けた取り組みに①県民向けプロモーション、②大学等と協働した地域アセスメント、③ごちゃまぜ師のスキルアップ・交流の三つの取り組みが構想された。そのうち、②大学等と協働した地域アセスメント事業を青森県内の大学が受託し、実施に至っている。

事業として構想された趣旨は、学生が地域における様々な取り組みについて調査し、共生社会の実現に向けてできることや必要なこと、多職種連携の方策を探ることであった。したがって、アセスメント実施地域の基本情報や地理的特性等を含めた地域アセスメントではなく、その地域で展開されている活動に焦点を当てた“地域活動アセスメント”として構想されている。

同事業は、地域に既にある様々な分野の活動を発掘及び再発見し、捉えなおすことを目的とした。地域資源については、既に自治体における様々な省庁主導の補助事業を基にした活動や種々の団体の理念に基づく地域貢献活動が展開されていることから、それらを新機軸から捉えなおし、繋ぎなおす視点を重視して計画された。したがって、福祉や保健・医療にとどまらず地域の活力になると考えられる取り組みや集いの場も対象にしている。

聞き取り対象は、青森県平内町において実施されている活動とし、受託大学に所属する学生によるインタビュー調査を実施した。表1に聞き取り対象選定と聞き取り調査までのプロセスを示す。

表1 聞き取り調査のプロセス

時期	内容	備考
2021年 10月	平内町役場との事前協議 平内町内の取り組みの全体像について聞き取り 委託契約詳細について検討	
11月	平内町役場及び社会福祉協議会への事前聞き取り 平内町内の取り組みの全体像について補足聞き取り 聞き取り対象活動の候補について聞き取り 学生プロジェクトメンバー募集 本研究及び事業の全体像の説明 聞き取り方法のレクチャー 平内町フィールドワーク	研究受託契約
12月	聞き取り対象活動の選定 対象活動担当者へ聞き取りの趣旨説明及び調査依頼 学生プロジェクトメンバーの聞き取り準備 聞き取り内容の精査 聞き取りチーム分けとスケジュールの調整	
2022年 1月	聞き取り調査開始 対象活動担当者へのアポイントメント継続	
2月	聞き取り調査	
3月	聞き取りデータのまとめ	

宮本 (2022). p2を一部加工

調査期間は、2022年1月～2月である。アセスメントに従事する学生メンバーは6名であった。学生メンバーは、調査期間前後の2021年12月～2022年2月中に地域性を理解できるよう平内町の基本情報を把握したり、フィールドワークを通して町内を視察したりする活動に

表3 聞き取り対象と調査実施状況

No	分類*	活動・団体など	実施 ※2	No	分類	活動・団体など	実施
1	健康	いきいきサロンもうら		11	地域	若手農家の取り組み	○
2	健康	外童子のサロン		12	地域	白鳥を守る会	○
3	健康	赤坂台のサロン		13	地域	生涯学習	
4	地域	伝統芸能保存の取組	○	14	地域	ほたての祭典	○
5	地域	藤沢活性化協議会	○	15	地域	ブルーロードライド	○
6	地域	集いの場としての商店		16	地域	地域学校協働活動	○
7	地域	もつけ衆		17	地域	コミュニティバス	○
8	地域	松緑神道大和山	○	18	地域	地域おこし婦人の会	○
9	地域	商工会青年部		19	福祉	白鳥ホーム	
10	地域	地域おこし協力隊	○	20	福祉	なつどまり	

※ 聞き取り対象活動の領域の便宜的な分類。
健康：健康増進・介護予防など 福祉：社会福祉関係の地域活動など
地域：地域振興、産業振興、文化継承、地域おこしなど
※2 ○：聞き取り調査を実施できた活動及び団体

宮本 (2022). p4を一部加工

も従事した。

聞き取り対象活動の選定にあたっては、事前に町役場及び社会福祉協議会から町内の活動実施状況を確認した。選定した地域活動に対して、その活動に従事する者に対して半構造化面接を用いた聞き取り調査を実施した。表2に聞き取り調査として事前に想定した項目を示す。

表2 聞き取り項目の想定

基本情報	・活動地区名、住所 ・活動名称の確認 ・活動目的
活動内容	・主な活動内容（内容、開催頻度、参加者（参加者の集め方、年齢層、男女比、職業など）、参加費（あれば）、会場、運営費内訳、物品管理） ・現在の活動状況（新型コロナウイルス感染症の影響、活動がどう変わったか、前後比較） ・活動期間 ・活動のきっかけ ・活動を展開するにあたっての工夫 ・協力、連携機関
情報提供者	・活動をやってよかったこと、活動したことによる効果（人や環境への影響） ・活動の魅力、やりがい ・活動に対する希望、今後の展望

宮本 (2022). p3を一部加工

聞き取り項目は、対象とした活動の特性に応じて、追加や削除し実施した。聞き取り時間は一つの活動や取り組みにつき30分～1時間程度である。学生メンバーは2～3名でチームを作り、記録を取りながら調査を実施した。さらに、聞き取りで作成した記録は学生メンバー全体で共有し、個々の学生が担当する活動以外の聞き取り情報も把握できるようにしている（宮本：2022. pp 1-4）。

表4 聞き取り調査から着目した課題と対応するスローガン

着目した課題	スローガン	コンセプトと取り組み例（一部抜粋）
①活動の維持の困難さ	地域住民に活動を周知 ～日常にある特別感を感じられないものに興味を～	住民の生活に欠かせない学校や会社、スーパーを巻き込む。 ・地域おこし婦人の会の料理レシピを配布する。 ・白鳥を守る会が実施している学校での授業を参考に各地の伝統芸能の授業を導入する。 ・会社に地元食材・料理の弁当配達をする。
	平内町の外に向けて魅力の発信 ～平内に行きたくなくなる きっかけづくり～	現在、個々に行われているイベントやそれらの周知方法を組み合わせる。 ・ほたての祭典に他の観光地などとコラボしたツアーパックを作る。 ・平内町の情報をSNSで発信したり口コミで広がる方法を増やす。
②活動の担い手不足と高齢化	担い手の育成と活動の保存 ～活動を後世に残す～	伝統芸能保存の会のDVD作成を応用し、他の活動も残す。新規の参入障壁を下げる。 ・町内の活動や白鳥の様子を映像資料化し残す。 ・作成した映像資料を様々な場所で放映する。

宮本（2022）. pp25-29から筆者作成

(2) 地域活動アセスメントのアウトプット（結果）

聞き取り対象とした活動と調査実施結果を表3に示す。

聞き取り対象とした20件の活動・団体のうち、11件に調査を実施した。

それぞれの活動の聞き取り結果から、学生メンバーは①活動維持の困難さと②活動の担い手不足と高齢化の二つの課題に着目し、三つのスローガンを掲げた取り組み案を提案した。表4に学生メンバーが着目した課題とスローガンの対応を示す。

これらの調査結果について、青森県及び平内町の関係者に対して2022年3月に報告会を実施している。

4. 考察

(1) アウトカム（効果）

地域活動アセスメントに従事した学生メンバーには、実施地域に対する印象の変化がみられた。表5にアセスメント実施後の学生の感想のうち、印象の変化に該当する箇所を示す。

表5 アセスメント実施学生の感想（印象の変化）

学生	感想
A	私はこの事業に参加する前は平内町について詳しく知りませんでした。しかし実際に町に足を運んで、町には沢山の興味深い地域資源を発見し、魅力でいっぱいな町であることを知りました。
B	これまで一度も平内町を訪れたことがなく、町についてほとんど知らなかったのですが地域アセスメントを通して、町は沢山の魅力で溢れていることがわかりました。 また平内町に遊びに行きます。

C	私は、地域アセスメントを行う前は平内町がどういうところかも知らない状態でした。しかし、各団体のアセスメントを通してその魅力に気づき、素晴らしいものがたくさんある町という認識が変わりました。
---	--

宮本（2022）. p31-32より抜粋

様々な先行研究により、接触によって地域愛着が高まることが指摘されている。特に、自動車利用よりも徒歩の方が正の相関を示す傾向や、あいさつをする・される頻度と地域愛着や援助行動との間に正の相関関係があるという報告もある（村山・倉岡・野中ら：2020、鈴木・藤井：2008）。今回の地域活動アセスメントでは、一人の学生メンバーにつき2件以上の聞き取り調査を実施しており、かつ、フィールドワークも体験している。そのため、実施地域への複数回の接触により愛着が高まったという印象の変化は容易に推察でき、アウトカムの一つといえる。

さらに、地域活動アセスメントを通して、地域における活動への参加意欲の高まりも窺えた。表6にアセスメント実施後の学生の感想のうち、参加意欲の高まりに該当する箇所を示す。

表6 アセスメント実施学生の感想（参加意欲の高まり）

学生	感想
D	楽しみながら地域のために活動に取り組めることは素敵だと思います。私もそのような人になりたいです。
E	普段何気なく暮らしていた自分の地域でも、多くの人や資源によって成り立っていたのだと気づかされました。このプロジェクトを通し私も地域に貢献できるような活動をしていきたいと強く感じました。

宮本（2022）. p31-32より抜粋

地域づくり活動に対する継続的な参加や協同の要因に関する調査結果では、地域社会に貢献できることの充足感や仲間と連帯する楽しさ、理想とする取り組みを行うことへの満足感が継続的な活動参加や協同の誘因として

挙げられている（福田・佐藤・駄田井：2007）。地域活動アセスメントは学生がチームで取り組んでおり、かつ、成果を還元する報告会の実施や報告書の公表など、学生が社会に貢献するイメージを持ちやすかったといえる。したがって、地域活動アセスメントによって地域における活動への参加意欲が高まったという結果も、支持されるアウトカムの一つといえる。

他方、アセスメント実施地域においては、報告会を実施した2022年3月から9月の間では、地域活動アセスメントから派生した新規事業等は確認できていない。行為に至る動機に関しては、複数の動機づけスタイルを調査した結果から、行動の生起過程にいくつかの動機づけが複合的に作用している可能性が示唆されている（岡田・中谷：2006）。地域活動アセスメントの結果は、アイデアの提供という点で動機づけの一つになる可能性はあるものの、行動に至る複合的な後押しにならなかった可能性がある。ただし、新規事業等が確認できなかった理由には、報告会を実施した時期が行政の一般的な予算要求時期から外れていることや、予算や事務処理の方針決定には時間を要するという手続きに関する要因も挙げられる。さらに、民間の新規事業については、新たな活動が無いだけでなく、活動があったとしてもその団体の情報発信の状況によって確認できないこと等も考えられる。しかしながら、これらの状況を加味したとしても、短期的なアウトカムとして活動の創発を期待するには、今回の地域活動アセスメントのプロセスでは限界があることが示されたといえる。したがって、アセスメント結果を地域へ波及させるには、次の段階の介入が必要であるといえる。

(2) インパクト（短期、長期の変化）

本研究における分析において、アウトカムに学生の変化が抽出された。これは、地域での短期及び長期的な変化が期待できるアウトカムとして捉えることができる。地域への愛着や様々な活動参加の意欲が高まるということは、短期的にはその地域のフォロワーになると期待できる。河本の学生とのフィールドワークを通じた関係人口づくりの実践では、地域に移住したり嫁入りしたりする例もみられている（河本：2019）。今回のアセスメント実施地域である平内町は、学生が多く居住する青森市から鉄道で30分程度の地域にあり、かつ、ほととの祭典など名産品を主としたオープンで参加しやすいイベントも継続的に開催している。したがって、長期的な変化には、フォロワーとなった学生が周囲の学生を巻き込み関係人口を増加させる効果も期待できるといえる。さらに、この効果は学生が携わる地域アセスメントの特徴的な効果であり、アセスメント実施主体によるインパクト

の機序に影響する要因となる可能性もある。

一方、アセスメント実施地域において、地域活動アセスメントの結果を活用した変化は数か月ではみられなかった。この点は、地域活動アセスメントに変化をもたらす役割を担えなかったというよりは、長期的な追視やデータ収集によって明らかにすべきインパクトの要素であると解釈できる。そもそも、今回の地域活動アセスメントは活動の捉えなおしが目的であり、アウトプット時点での目標は一定程度達成しているといえる。また、本研究では情報を受け取った関係者や調査協力者、地域住民などの変化の可能性を測定できていない。したがって、実施地域における変化については、質的・量的なデータ収集が必須であり、その点に言及できないことは本研究の限界である。ただし、成果目標として新たな取り組みの創発を設定するならば、アセスメントによって得られた情報を活用した介入や継続的な創発支援が必要であることが示唆されたことは、本研究で強調しておくべき成果の一つといえる。

5. 結語

本研究は、学生による地域活動アセスメントの結果から、その実施地域へのアウトカムとインパクトを検討した。その結果、アセスメントに携わった学生の実施地域に対する印象や地域における活動に対する意欲の変化が認められ、実施地域への短期的・長期的な変化としてインパクトをもたらす可能性が示唆された。3か月程度のプログラムであっても、地域にとって肯定的な効果が期待できるという点では、示唆に富む結果といえる。

一方、実施地域の変化を測定するためのデータ収集が今後の課題として挙げられた。地域への影響を検討するには、長期的な変化の可能性を含めて測定する必要がある、それらに言及できない点は本研究の限界である。ただし、アセスメント実施地域における新たな取り組みの創発などの短期的な変化には、アセスメントによって得られた情報を活用する介入が必要であるという示唆は、今後の地域アセスメント等のプログラム開発において留意すべき事柄といえる。今後、本研究で示唆された仮説を検証するための実証的研究や、アセスメントを基に介入するプログラムの効果測定が課題である。

COI

本研究は、令和3年度アセスメント事業－平内町における地域資源の発掘・分析・活用に関する研究（青森県）の成果を基に分析・考察を加筆したものである。

文献

- 内閣府 (2016) 『ニッポン一億総活躍プラン』
- 宮本雅央 (2022) 『学生から見た地域の強み再発見 in 平内』 令和3年度地域アセスメント事業研究報告書. 青森県立保健大学.
- 塚本一郎・関正雄 編 (2020) 『インパクト評価と社会イノベーション-SDGs時代における社会的事業の成果をどう可視化するか-』 第一法規.
- OECD 「What are results?」 (<https://www.oecd.org/dac/results-development/what-are-results.htm>, 2022.8.20).
- JICA 「インパクト評価」 (<https://www.jica.go.jp/activities/evaluation/impact.html>, 2022.8.20).
- 村山幸子・倉岡正高・野中久美子・ほか (2020) 「児童・生徒のあいさつ行動と地域愛着および援助行動との関連」『日本公衆衛生雑誌』 67 (7). 452-460.
- 鈴木春菜・藤井聡 (2008) 「地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究」『土木計画学研究・論文集』 25 (2). 357-362.
- 福田恵子・佐藤豊信・駄田井久 (2007) 「地域づくりへの継続的参加に関する要因分析-活動者の貢献と効用の享受の観点から-」『農村計画学会誌』 26 (2). 76-85.
- 岡田涼・中谷素之 (2006) 「動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響-自己決定理論の枠組みから-」『教育心理学研究』 54. 1-11.
- 河本大地 (2019) 「農山村でのフィールドワークを通じた持続可能な『関係人口』づくりの実践-兵庫県美方郡香美町小代区におけるゼミ活動から卒業生の『嫁入り』まで-」『経済地理学年報』 65. 96-116.

The Impact of Community Activity Assessment by Students on the Local Community : Analysis of the Community Activity Assessment Project in Hiranai Town, Aomori Prefecture

Masao MIYAMOTO*

Abstract :

Purpose: The purpose of this study is to clarify the impact of community assessment by university students on the community. To this end, we analyzed the results of a community activity assessment project conducted by university students in Hiranai Town, Aomori Prefecture.

Methods: This study analyzed the changes in those involved in the assessment project by setting outputs, outcomes, and impacts as a framework based on the theory of impact evaluation.

Results and Discussion: As a result, there was a change in the students' impressions of the community and their willingness to participate in activities in the community. These changes suggested the possibility of having an impact on the community where the assessment was conducted.

Key Words : Regional symbiosis Society, Community Assessment

* Department of Social Management, Social Work Course